

博士論文要旨

論文題名：在日朝鮮人詩人金時鐘の故郷観

—2000年以降の作品を中心に—

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

オカザキ リョウコ

岡崎 享子

本論文は、在日朝鮮人一世の詩人である金時鐘の言語観と故郷観について、2000年以降に発表された作品の分析を通じて明らかにすることを目的とする。金時鐘は1929年に植民地朝鮮に生まれ、幼少期を済州島で過ごした。彼は日本語の教育を受けた皇国少年であったが、1945年8月15日に解放を迎えると、自ら朝鮮人であることを自覚し、失われた朝鮮語を取り戻そうとした。しかし、1948年に済州4・3事件に遭遇し、翌年渡日して大阪の朝鮮人集落である猪飼野で生活するに至る。それから現在に至るまで、「在日を生きる／境界を生きる」ことを説きながら、旺盛な文学活動を行っている。

金時鐘に関する研究は、彼をディアスポラの詩人として捉え、主に『地平線』（1955）、『新潟』（1973）、『猪飼野詩集』（1978）といった初期の作品を対象として、ポストコロニアルの観点から論じられてきた。これに対して、本論文では、2000年以降に発表された作品を考察対象とする。具体的には、済州4・3の体験が記された第7詩集『失くした季節』（2010）と、3・11東日本大震災の影響を受けて書かれた第8詩集『背中の地図』（2018）を取りあげる。先行研究で論じられていないこれら近年の作品を、「済州4・3文学」や「震災後文学」という側面から分析することによって、ディアスポラ文学としての在日朝鮮人文学という枠組みに留まらない、より多角的な金時鐘作品の読み方を提示する。

本論文は3部で構成される。第I部では、金時鐘の言語観と故郷観の関係について考察した。金時鐘は自らのエッセイなどを通じて、「日本語」「朝鮮語」「在日朝鮮人語としての日本語」「生理の言語」という4つの言語について語っている。本論文では、金時鐘が2000年以降に尹東柱の朝鮮語詩集『空と風と星と詩』の翻訳と金素雲の『朝鮮詩集』の再翻訳を行ったことに着目し、これを「朝鮮語」と出会い直す作業であったと解釈した。また金時鐘は「在日朝鮮人語としての日本語」を提唱し、それを「生理の言語」であると表現した。本論文では、金時鐘が作品中で朝鮮語の読みをカタカナで頻繁に表記している点に着目し、「在日朝鮮人語としての日本語」がいかなるものであるのか考察した。さらに、金時鐘

は最新の「献詩」（2022）において、在日朝鮮人の生活の中で継承される「生理の言語」について書いている。この作品の分析を通じて「生理の言語」とは父母から伝えられる故郷の言語であり、金時鐘の言語観の根底にあるものであることを論じた。

第Ⅱ部では、第7詩集『失くした季節』（2010）について分析を行った。金石範『火山島』や、金時鐘が発表した『地平線』や『光州詩片』（1983）にも済州4・3の描写が断片的に描かれている。しかし、『失くした季節』では済州4・3が作品の主要テーマとして前面に掲げられている。本論文では、植民地解放の「夏」から済州4・3の「春」へと移り変わる金時鐘独自の季節観の分析を通じて、済州4・3の記憶が作品中にどのように表象されているのか明らかにした。また、『失くした季節』と同時期に取り組んでいた尹東柱の詩の翻訳作品とを比較分析すると、両作品には共通点がみられる。特に「在所」という故郷を表す詩語は、尹東柱の詩の原文「제고장」から訳出されたものであり、尹東柱の故郷観が金時鐘の故郷観に影響を与えた。さらに金時鐘は『失くした季節』を発表した後、済州4・3の犠牲者の遺体が漂着した対馬で、済州4・3慰霊祭に関する取り組みに関わった。本論文では、金時鐘が「慰霊」という形で、日本にいなながらも故郷である済州島と繋がる方法を見出したことを指摘した。

第Ⅲ部では、3・11をテーマにして書かれた『背中の地図』（2018）について考察した。金時鐘にとって3・11は非常に大きな衝撃を与えた出来事であり、特に水や海にまつわる記憶を呼び起こした。本論文では、済州4・3当時に見た水葬による死者の様子が、3・11の津波の死者と重なり合うように描かれていることなど、3・11と「水」に関連する金時鐘の個人的な記憶が交差して描かれている点を指摘した。その他、在日朝鮮人の人々が新潟港から船に乗って朝鮮民主主義人民共和国へと向かう帰国事業の記憶がこの作品に表現されて点について論じた。また、『背中の地図』では原発批判が大きなテーマとして設定されている。そこには、利便性のみを追求した社会への批判が繰り返され、原発事故が忘却されている現状に警鐘を鳴らそうとする意図がみられる。また作品中の登場人物である「私」が被災地に出向き、その現場を目撃することで「私」が「己のふるさと」を再認識し、故郷へ帰る決意をするという構図から、本作品の大きなテーマが「故郷喪失」であることを論じた。

最後の終章では、猪飼野に流れる平野川の水路が海へと繋がっていく様子を描いた「献詩」の分析を通じて、「生理の言語」を語り「在日を生きる」金時鐘が、最終的に帰ろうとしている場所が済州島であること、そこはまた自らが幼少期を過ごし、両親が眠る故郷であることを結論として提示した。